京都御苑内の児童公園にて

編集後記 From Editor

今号の論考において石川英輔さんは、日本の江戸時代は、見方によっては決して「おくれた」時代ではなかったと強調されている。「エネルギー効率、つまり製造に必要なエネルギーと生産量を比較するのなら、江戸時代の産業の効率の良さは、驚異的と言うより奇跡的と言っていいほどだった」という。

これはつまり、ひとつの社会を一種類の尺度で測ってはいけないということだ。

同じようなことを、以前に読んだ本でも感じた。日本近代史家の渡辺京二さんの著書『逝きし世の面影』によると、明治時代初め頃までの日本の社会は、その後の日本とは、いわば別個の「文明」だったのだという。

渡辺さんによると、江戸時代の末から明治時代にかけて日本を訪れた外国人の多くが、当時の日本人が、いかに幸せそうに見えるかを繰り返し書いているそうだ。この頃の日本人は、大人も子どもも高齢者たちも、みんな心の底から笑っていて、笑顔が絶えなかったらしい。

英国公使のオールコックは、「日本人はいろいろな欠点をもっているとはいえ、幸福で気さくな、不満のない国民であるように思われる」と書き、ある人は「下層の人々が日本ほど満足そうにしている国はほかにはない」と感嘆している。そこからさらに進んで、イギリス人の日本研究家チェンバレンは、日本には「貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」とまで明言している。

翻って現代の日本では、大人も子どもも不機嫌そうだ。社会的格差がますます顕在化しているとも言われる。格差といっても、諸外国と比べたら、さほどのものでもないという見方もあるが、結局、問題なのは、それを測るモノサシが一種類だということなのだろう。近頃は、特に所得や資産がすべてであるかのように言われ、さらに自己責任という考え方があいまって、逃げ場のない状況が生まれている。でも本当は、他にも異なった豊かさの尺度があるはずだ。

今号のテーマである「生活者の温室効果ガス削減問題」についても同様である。足るを知り、素朴な生活を楽しむ術を身につけたい。不況が続いた時代には、「環境では食えない」と声高に言われた。しかし、その「環境」が維持されなければ、もはや我々は生き残っていくことはできないのだから。

——橋本 佳也

表紙・裏表紙写真　マンションの家庭菜園にて／鳥取環境大学のバイオ燃料で走るスクールバス／京都金閣寺隣のエコビレッジ「風の荘」

CEL 83号　特集 ■ 生活者ができる地球温暖化防止　発行●平成20年1月10日　頒価1,000円（送料別途）

■発　行　大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所（CEL）
〒541-0046　大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人　多木秀雄 *Hideo Taki*
■編集人　橋本佳也 *Yoshinari Hashimoto* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション（株）内　CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F　TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2008 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写
※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ〔http://www.osakagas.co.jp/cel/〕でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は　CEL編集室　Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで